

# 南方（ビルマ）

衛生兵で

ビルマ、マニラへ

兵庫県 千古 一三

私は大正九（一九二〇）年一月生まれで、徴兵検査は昭和十五（一九四〇）年四月でした。視力検査で徴兵忌避と疑われ、最後まで残されました。左眼の視力が一・〇で右眼の視力が〇・二、銃を撃つには右眼で狙うのですから「お前の右が悪いのはおかしい」と口には出さぬが最後まで判定を延ばされました。

本人はそれまで気が付きませんでした。結局そんなことで衛生兵になったのだと思っております。第一乙

種でした。眼鏡を掛けていなかったから余計疑われたのだと思っています。

私の家は農家で一町歩の田と「揖保」の手延べそうめんを作っています。男五人、女五人の長男の私は、小学校のころから父と母が作るそうめんの手伝いをしていました。

高等小学校卒業後、夜は青年学校に通って、昼は農協に勤務しましたが、農協の帳簿で我が家の借金が多いのにびっくりして、どうしてこんなに借金が多いのかなあと思ったことがあります。我が家の家計は苦しかったのです。いまだこそ農業も機械化されませんが、昭和十年代はほとんど手作業でしたから苦勞しました。

昭和十六年三月一日、現役兵として姫路の歩兵第百十一連隊に入隊しましたが家のことが心配でした。一緒に入隊した仲間が三十人でした。本科の教育を三カ月受けて、六月一日付けで姫路陸軍病院に転属となりました。ここで六カ月の衛生兵教育を受けて分病舎の結核病棟に勤務、ここに三年間おりました。

満州のジャムス（姫路が原隊）の第五十四師団に入った初年兵が胸をやられて、胸膜炎や肺結核になって、姫路の病院にどんどん後送されてきました。私は一選抜で病院にきていましたので恩給診断ばかりやらされていました。恩給診断とは患者の病状を見て、戦病に当たるかどうかを見て、第○項症かを判断するのです。

入隊して三カ月未満で発病したものは気の毒ですが、戦病に該当しないのです。私は病症日誌を見て病名を書いて病院長の印をもらって決定するのですが、少しでも患者に有利になるように心掛けました。

内地で教育を受けてから満州へ渡った兵は罹病率は低かったのですが、いきなり北満の地に行った兵の罹

病率は高かったですね。この陸軍病院に勤務中には、毎日のように結核病棟から死者が一、二人出ました。

当時兵長だった私は門衛司令（病院ではこう呼んでいた。衛兵司令のこと）を命ぜられ、屍衛兵を立て、市営の火葬場で茶毘に付し、死亡と同時に知らせた遺族の手に遺骨を渡しました。

この結核病棟に三年間勤めて伍長に任官と同時に満期除隊となりました。昭和十九年三月でした。

その三カ月後の六月十一日、臨時召集で歩兵第百十一連隊補充隊に再び入隊しましたら、私と同時に伍長に任官したものが二人も入ってきました。「ビルマ要員」といわれました。第四十九師団（狼兵団）第四野戦病院要員となりました。昭和十九年七月二十二日門司港出港、乗った船は「チャイナ丸」、船団で一番小さい速力の遅い貨物船で、前途が心配でした。

船団の中の大きな船や速力の速い船は半分以上敵の潜水艦にやられ、二カ月掛って、やっと九月十八日にマニラに着きましたが、荷物の陸揚げ中、敵機の空襲

でやられました。

十月十七日、マニラ港を出港、シンガポールに十一月三日上陸、ビルマ入りの準備に掛りました。病院長（軍医大尉、額田須賀夫）は歴戦の指揮官でした。「本科の兵隊は良い船に乗ってもらえ。我々衛生関係はボロ船で結構だ」と、ボロ船に乗せられたお陰で無事シンガポールに着くことができました。他の良い船は、狙われて沈んでしまいました。

軍医さんは開業医の年寄りで召集された人が見習士官になっていました。下士官兵は三〇歳以上のものが多かった。第四野戦病院は全員二百九十六人。シンガポールで衛生用具を補充してマレー半島を鉄道に乗ってビルマに向かったのが昭和十九年十二月十二日でした。

日本軍の造った有名な泰緬鉄道に乗りましたが、深い谷に架かる橋が多く、途中機関車や貨車が横倒しになっており、爆撃の激しさが窺われました。

途中、国境地帯になると鉄道線路の状態が波のようになっいて危険なので、タイ駐屯の輸送隊に頼んで

トラック輸送で国境を越えビルマに入りました。時に十二月十八日でした。

途中、米英軍の捕虜を見ました。病院は二つに分かれ、私ら第二病院はタトンから前線に向かったら、「三」「祭」「烈」などの部隊がどんどん下がって来た兵に、「お前ら負け戦なのに何しに行くんだ」と言われ、命令なしに一緒に下がってしまったら、途中でビルマ方面軍の将校が並んで「誰の命令で下がったのか！」と制止されました。しかし将校がいなくなったら再び退却が始まりました。

シタン河まで来たら、輸送隊が筏で渡してくれたので助かりましたが、一週間後に川岸にたどり着いた他の部隊は、川が雨が降って増水し、筏が流され、多くの兵が命を落としたそうです。

前線から後退する兵隊の服装は風雨にさらされ色あせて、師団長だか何だか分からぬくらいひどいものでした。昼は爆撃で歩けないので民家に入ります。夜になると後退を始めるのです。塩だけ持っておれば食い

物は何がしかありました。

野戦病院も下士官単位に分かれて後退することになり、私は鉄道線路を歩いて後退しました。大回りになります。雨が降ると道路が水浸しになっても線路だけは高く歩きましたからね。十五、六人の兵を連れて後退しました。タトンに大きな兵站がありました。病馬廠から馬肉、牛肉の配給を受けました。

終戦の時は、近くに通信隊がいて、情報を傍受して分かりました。隊長が近くにあつたお寺に「下士官以上集まれ！」ということになり、地下室に集まり、武装解除の命令が下りました。

武装解除は翌日英軍の伍長二人が来て、武器一切を持ち帰りました。山の中に野病を開設していたら、英軍の飛行機が大きな袋に米を入れて投下してくれました。副食物はコンビーフや牛乳等、どんどんトラックで届けてくれました。

私は野病の炊事係をしていましたのでミルク飯を作りました。濠洲産の野菜がどんどん入って来ました。

マリアに罹ると高熱で衰弱し、肝臓が三倍膨れて死に至る兵が多かったものです。軍医さんは、後退してくる兵隊が衰弱して死亡すると解剖していました。

モールメンから帰ることになり、昭和二十一年六月、ここに到着すると、第一戦部隊の人たちが戦犯容疑で待機しておりました。私たちの野戦病院は戦犯容疑は全く無いので、一番先に乗船が許され、六月二十六日出港、七月十二日広島大竹着、十四日召集解除となりました。終戦後軍曹に進級しました。

終戦後の九月、小型機が何か白いものを投下しました。爆弾だと逃げ回りましたが、拾い上げると日本語で書かれたビラでした。「軍陣画報」と題した半紙大の写真が十枚載ったものでした。日本降伏の実情を日本兵に知らせるもので、川辺虎四郎中将が天皇署名の信任状を米國代表に手渡す写真と信任状の写真も載っていました。これは平和祈念事業特別基金に寄贈したいと思っております。

昭和十九年九月、マニラに到着、物資受領で遠くま

でトラックで行った途中、満州から来たんだと鉄兵団が天幕を張って、何万人もの兵隊がずらっといましたが、恐らくあの人たちも全滅したのでしょうね。

私の妹むこが陸軍曹長で、マニラから還って来たのですが、佐賀病院の精神病棟で両手両足をくくられて入院していました。マリアに雇って精神異常になったのでした。私が「陸軍衛生軍曹の私が責任をもって預りますから」と頼んで列車に乗せて家に連れて帰りましたが、車中暴れて困りました。五カ月かけて熱を下げたら平常に戻りました。

## ビルマ出征の回顧

島根県 田部 敏夫

私は大正十一（一九二二）年六月二十六日、島根県仁多郡横田町大字八川に生まれました。徴兵検査は昭和十七（一九四二）年で第三乙種合格。私はもともと瘦せ形で、検査日の数日前より下痢で一層痩せていた

ので第三乙種になったようです。同年生まれの友達の現役入営は皆十二月に入営しましたが、私は第三乙種で、召集は翌年の三月でした。

私が応召した時の家族の構成は左の通り。

祖父	健在	鎌や種物の行商兼農業
祖母	〃	〃
父	〃	農機具販売兼農業
母	〃	〃
長男	死亡	夭折
二男（本人）	健在	穀物検査員
長女	〃	学生
三男	〃	〃
二女	〃	〃
四男	〃	〃
三女	〃	〃

ということでは生活程度はまあ中流位で、私が兵役に服することによる家庭の経済的打撃はほとんど無く、私としては後顧の憂いなく、凄愴苛烈な戦局に処して先に十二月に現役入営した友人の後を追って、召集に応